これからの、生活科と総合的な学習の時間

創設から生活科は22年、総合的な学習の時間は12年が経過しています。梶田叡一先生、田村学先生に、現状をふまえ、あるべき姿と今後の展望を大いに語っていただきました。

文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官・
国立教育政策研究所教育課程研究センター教育課程調査官　田村 学

人間教育研究協議会代表、学校法人聖ウルスラ学院理事長、
学校法人奈良学園理事　梶田 叡一

梶田 叡一

かじた えいいち＊松江市に生まれ、米子市で育つ。京都大学文学部哲学科（心理学専攻）卒業。文学博士。国立教育研究所主任研究官、大阪大学教授、京都大学教授、京都ノートルダム女子大学学長、兵庫教育大学学長などを歴任。この間、中央教育審議会副会長、教育課程部会長なども務める。
●著書に、『和魂ルネッサンス』（あすとろ出版）『新しい学習指導要領の理念と課題』（図書文化）、『教師力再興』（明治図書）、『教育評価』（有斐閣）、『基礎・基本の人間教育を』『教師・学校・実践研究』（金子書房）など多数。

田村 学

たむら まなぶ＊新潟県生まれ。新潟大学教育学部卒業。新潟県内の国公立小学校教諭、柏崎市教育委員会指導主事などを経て、平成17年から現職。
●著書に、『新版小学校生活 イラストで見る全単元・全時間の授業のすべて』1・2年（東洋館出版社）、『考えるってこういうことか！「思考ツール」の授業』（小学館）、『リニューアル総合学習の時間』（北大路書房）など多数。

学校での実践状況と生活科創設の意図

梶田　生活科も総合的な学習の時間もゆとり教育の象徴だと誤解している人が、まだいます。田村先生は、生活科創設の頃、学校現場ですばらしい授業をされました。このときの経験を土台に教科調査官として全国を指導しておられます。これは非常によいことです。そういう先生の目から見て、今度の学習指導要領での生活科、総合的な学習の時間について全国の状況はいかがですか。

田村　確かに誤解があったと思いますが、全体的には好ましい方向に向かっていると思います。生活科でいえば、「体験」は重視してきましたが、体験を学び直すことが不十分であったり、質の高まりが十分でなかったりする事実もありました。今回の改訂で「言葉」が入りました。言葉と体験は生活科にとっては、ぴったりくるキーワードです。

梶田　言語活動が入ることによって、体験が質の高い経験になっていくのですね。

田村　リフレクション（振り返り）を入れることで、体験が本物の学びになります。リフレクションの場面で体験を言語化することで、大切にしてきた気付きが形になって現れます。気付きが明確になるので、子どもの活動意欲にも結びつきます。教師にとっても言語化されているので評価しやすいよさがあります。

梶田　本来の生活科の姿ですね。

学校ではどうしても教科学習が中心になります。教科学習は文化遺産を伝える役割があり、大事なところはどうしても先生が説明して子どもが筋道を立てて理解できるようにしています。

生活科も総合的な学習の時間も、教科学習とは逆方向で学習活動を組織しています。体験から出発して気付きが生まれ、認識に高めていくわけです。だから、教師はできるだけ表に立たないで、場づくり、きっかけづくりをして、子どもたち自身で気付くことが大事になります。

田村　例えば、アサガオの発芽について、これは双葉、これは本葉と教えることは簡単ですが、子どもがそこに関心をもって、特徴に気付いて「こんな形をしているんだ」と自分から積み上げていくような概念形成をしていかないといけません。その意味では、低学年に生活科を位置付けたことは、すばらしい英断だったと思います。

梶田　当初、小学校低学年教科構成等検討懇談会で、いろいろ検討しました。当時は低学年の理科、社会は合科的にやってよかったのですが、それをもう一段進めて一つの教科にするということで議論しました。そして、「自分と社会」「自分と自然」「自分自身」ということを柱にした教科をつくろうということになったのです。

田村　その三つを視点にしたところが、この教科のすばらしい発想だと思います。

梶田　理科や社会は、自然科学、社会科学が背景にありますから、自分と切り離して対象化して客観的認識を成立させていかなくてはなりません。しかし、幼少の頃は対象化しすぎたら、自分自身にとって本当の知識にならないのです。心理学でエゴ・インボルブメント（自我関与）といいますが、対象と自我関与しながら実感的認識を育てていくことをやろうとしたのです。

田村　子どもたちが自分で動きながら、自ら関わることで、子どもたちの知的な概念がしっかり形成されていくのです。

求められる より高い教師力

梶田　小学校低学年は、まだ具体操作の時期です。具体的な活動を通じ、また具体的なものを操作することで、考え、ものがわかっていく時期です。算数で数え棒を使うのはそういう意味です。高学年になると形式操作、抽象的な概念が使えるようになり、体を動かさなくても頭の中だけで学びを進めることができます。低学年ではそういうわけにいかないのです。

田村　触れて数えてということが一致することによって、数の認識をしていきます。自然も同じです。外に出かけ、緑の葉っぱを見て、秋になったら紅葉して色が変わり、「だから秋はこうなるのだ」ということを認識します。触れること、目で見ること、匂いを嗅ぐことなどで、季節感が明らかになっていきます。

梶田　だからこそ、教師の側で場の設定、場の下調べが大事なのです。秋と出会わせようと公園に連れていくだけではだめです。公園のどの入口から入るとよいかを下調べしておくことが大事なのです。この入口なら、子どもにとってパッと目をひくモミジがある、この入口なら子どもがあっと思うような赤トンボが飛んでいるなどと調べておきます。子どもの側からしたら、自然に自分で見つけたわけですが、教師の側からしたら、場の設定として意図的にあらかじめ用意しておくわけです。

田村　生活科をより一層高めるためには、教師が直接働きかけるのではない間接的な、より質の高い指導が求められるのです。

梶田　生活科や総合的な学習の時間は一単位時間ではできない場合があります。固定的に「何曜日の何時間目は、生活科ある

いは総合的な学習の時間」というのではなく、活動を想定して、思い切って1週間ごとに2時間ずつ取るというように、集中的にやらざるを得ない場面もあります。そうしたカリキュラムマネジメントが必要です。

田村　生活科や総合的な学習の時間の導入で、教師にはカリキュラムをデザインして、それをいかに適切にマネジメントするかが問われています。

梶田　教師は教え授ける教科学習をどうしてもモデルにしがちですが、このモデルで生活科や総合的な学習の時間をやってもらっては困ります。全く違う種類の関わり方、子どもを中心とする活動でなくてはなりません。子どもが見つけ、子どもがこだわり、子どもが追究・探究する。教師が口を出す場面もあるけれど、まずは子どもです。

田村　かつての教師は知識を授け与えました。それももちろんありますが、子どもが自ら学んで、自らの中で確かな知識を構築していくという正反対の学習を実現しなければなりません。それが実現できれば、これまでの教え授けていた教科指導の質も高めることになります。

梶田　そうです。教師が前に出て、教え授ける場面があります。また、後ろに退いて口を出さず、まどろこしくても、子どもにやらせないといけないという場面もあるのです。その使い分けができることが大事です。

田村　これまでの日本の教師がもっていた力がさらにブラッシュアップされて、より一層確かな教師力になっていくのは、非常に貴重なことだと思います。子どもの側から積み上げていく授業ができるようになってきている先生が、生活科や総合的な学習の時間で育ってきています。

主体性を育てる、探究的な学習

田村　生活科や総合的な学習の時間が導入されたことで、さまざまな影響がありました。教師の指導力、教育課程の編成、地域との連携などには、大きな成果があったと思います。

梶田　地域との連携もそうですね。地域に出て行って、地域の人たちに協力してもらう、場合によっては地域の方々に先生になってもらいながらやっていくということは、生活科や総合的な学習の時間で初めて教育活動に根づいたと思います。

田村　東日本大震災があったときも、日常から生活科や総合的な学習の時間で地域と一体化していたところであればあるほど、さまざまな復興が進んでいるとも聞いています。

梶田　連携がうまくいっているところほど、本当の意味での絆が発揮されているようです。

田村　東日本大震災は不幸な出来事でした。しかし、そこでは、自ら考え、自ら判断して、自ら行動することが、いかに大事かが明確になったと思います。

梶田　そのとおりですね。

田村　子どもが自立し、主体的に判断して行動できるようになってほしい。その際、キーワードになるのは「探究」ではないかと思います。総合的な学習の時間では探究的な学習をイメージして、スパイラルに高まっていくことを目指しています。

梶田　探究はどの教科でも大切ですが、「探究を中心的に養う場が総合的な学習の時間である」と学習指導要領に書かれています。これは大事です。

田村　総合的な学習の時間の目標に「探究的な学習」という言葉が入りました。教師にとって、探究的に学ぶことが質の高い学習なのだとイメージが捉えやすくなりました。

梶田　生活科や総合的な学習の時間が出てきた頃は、指導が大事なのか、子ども中心が大事なのか、あるいは教師主導型でよいのか、探究が大事なのか、といった一面的に単純化した議論がありました。そうした議論は、最近では全く出てきていません。国語や算数に対する関心が高まっていますが、生活科や総合的な学習の時間も大事だと捉えられるようになりました。教育には多面的なアプローチが必要であり、子どもにも多面的な、スタイルの違う学習活動をやらせないといけないのです。

田村　教育課程はそうしたものをバランスよく位置付け、お互いに響き合い相乗効果を発揮して子どもが育っていきますから、どちらかだけという話ではないのです。

梶田　それが、二十数年前からの、田村先生の実践なのですね。

田村　私が若い頃やっていたときは、体験も大事ですが、同じくらい言語化することを大事にしていました。言語化するとなると、どうしても国語のイメージが強いのですが、数値を使って算数ならではの考え方で分析したり、理科や社会で学んだことを活用したりして、探究し、同時にしっかり定着していくことを大事にしました。

汎用的な能力に結びつく要（かなめ）の時間

梶田　2008年の中教審答申で言葉の力を大事にしていますが、言葉には、記号も数字も入っています。それを大事にしないといけないのです。生活科や総合的な学習の時間の中でも、狭い意味での言葉だけでなく、記号的なもの、数字的なもの、サイン、シンボルを全て言葉として考えていくことになるわけです。

田村　体験で得た身体の感覚と記号化されたものがうまくつながり合うイメージです。身体で学ぶことと、記号化されたものを思考操作しながら抽象的に学ぶことを、行きつ戻りつしながら子どもは力をつけていきます。その意味では総合的な学習の時間が、学校でどういった形で実現されるかで、国語や算数、数学などの学力にも大きな影響が表れると思います。

今回の『全国学力・学習状況調査』に、「総合的な学習の時間では、自分で課題を立てて、情報を集めて整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という探究的に学んでいるかを問う質問事項が入りました。この設問と各教科のA問題、B問題に、きれいに相関が出ていて、特にB問題で顕著に相関が出ています。つまり、総合的な学習の時間を丁寧に探究的に行うことは、B問題などの成績に関係があるというデータが出ています。

梶田　これまでも、総合的な学習の時間とB問題の正答率の関係はいわれていました。今回、また非常にはっきり出ました。

田村　秋田県などでは、この探究に関する質問に対してとても高い数値を示しています。総合的な学

習の時間に関しては、ただ体験というだけではなく、期待する汎用的な能力に結びつく時間として要の時間になっているといえます。

梶田　秋田県の具体的な事例に学ぶことが大切ですね。

田村　体験だけでなく、探究となるような指導をしていくことが大事なのです。

梶田　この『全国学力・学習状況調査』の問題をつくるときに、あえて論述のB問題も取り入れたのは、主体的な学力である問題解決を具体でやれることを見るためでした。実践の場面でいちばん出てくるのが総合的な学習の時間です。

田村　B問題が入ったので、学力に対する教師の考え方が広がって豊かになったと思います。本来、学力というものは暮らしの中のさまざまな問題場面で使えなければ意味がありません。そう考えると、国語と算数を大切にしながら、一方で総合的な学習の時間が充実していけば相互作用の効果はきわめて大きいです。今、成果が見え始めています。それは今回、「探究的な学習」として総合的な学習の時間のイメージを明確にできたからです。

梶田　習得・活用・探究の三位一体で、ということですね。

田村　総合的な学習の時間の目標の中に「探究」ともう一つ、新しいワードとして「協同」が入りました。探究は一人でも可能かもしれませんが、探究の質を高めるためには、協同的な学びが必要です。協同も学力形成や将来の実社会を考えると重要な要素です。

梶田　みんなと手を組みながら一緒に、チームとして問題を解決することが、世の中での普通の問題解決の仕方です。

田村　異なる価値観や考え方をもっている他者と協同しながらやっていく。そこで触発され、新しい知がクリエイトされていきます。そういう経験を小さいときからしてほしいのです。

教科とのよい循環を生んでいく授業を

梶田　最後に、生活科や総合的な学習の時間で、こういうことを念頭において取り組んでいってほしい、とお考えになっていることを挙げてください。

田村　幼少の連携をふまえた「スタートカリキュラム」を意識することが大切です。低学年の生活科は、子どもたちが学校の主人公であるという意識を全校の先生にもってもらう重要な場面ですから、幼児期との連携を視野に入れたスタートカリキュラムを学校でしっかりつくってほしいと思います。

総合的な学習の時間については、探究、協同のイメージによって授業がよくなっていると思います。教科で学んだことが総合的な学習の時間で使われる、総合的な学習の時間でやったことが教科に生きるという、よい循環が生まれているように思います。そうすると、総合的な学習の時間は汎用的能力を育成する要の時間という役割を担っていくことができます。そんなカリキュラムデザインをして、授業で具体的な形にしていただければと思います。

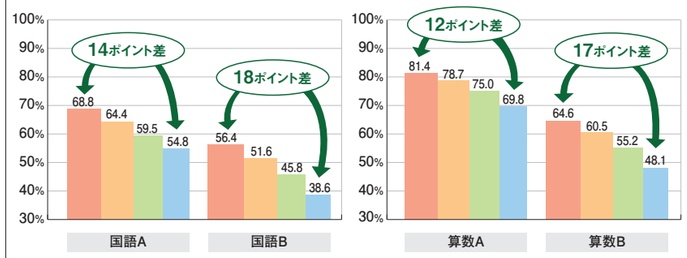
梶田　生活科も総合的な学習の時間も、より一層定着して、主体的な学習が身につく機会になればと願っています。

生活科、総合的な学習の時間の大切さや進め方について、興味深いお話をいただき、ありがとうございました。

■総合的な学習の時間と学力との相関 ―平成25年度全国学力・学習状況調査（小学校6年）

「総合的な学習の時間の中で、自分で課題を立てて、情報を集めて整理して、調べたことを発表するなどの学習活動に取り組んでいますか」という問いの回答と平均正答率のクロス集計

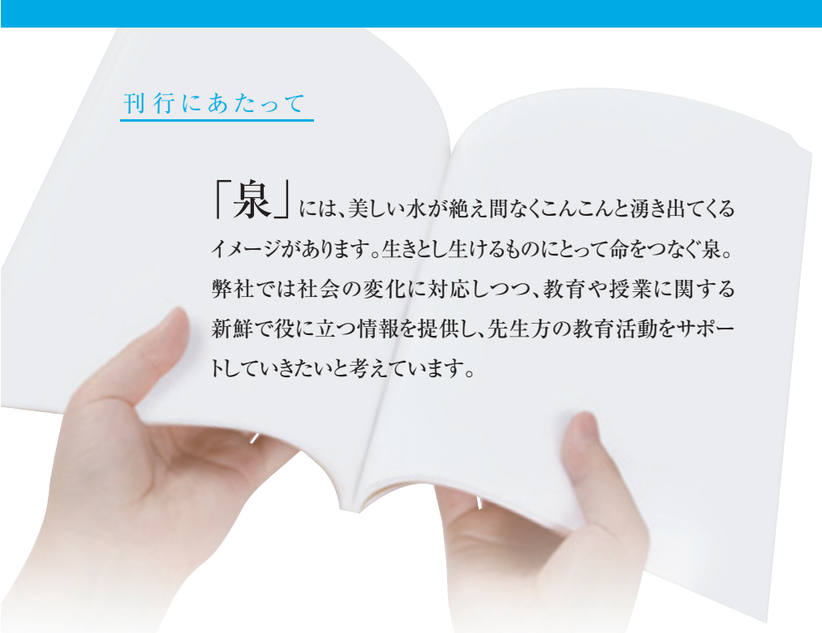
「1 当てはまる」「2 どちらかといえば、当てはまる」「3 どちらかといえば、当てはまらない」「4 当てはまらない」



「総合的な学習の時間」の趣旨に即した活動に取り組んでいる児童ほど、平均正答率（特にB問題）が高い。

※出典 文部科学省・国立教育政策研究所「平成25年度全国学力・学習状況調査報告書クロス集計」より

刊行にあたって



「泉」には、美しい水が絶え間なくこんこんと湧き出てくるイメージがあります。生きとし生けるものにとって命をつなぐ泉。弊社では社会の変化に対応しつつ、教育や授業に関する新鮮で役に立つ情報を提供し、先生方の教育活動をサポートしていきたいと考えています。

BOOKS 教育の泉

BOOKS 教育の泉 シリーズ

近刊ご期待ください！ ●各巻A5判 ●定価:各巻とも本体950円＋税

VoL 6
「生活科を通して よりよい学級づくりをめざす」
よりよい学級集団をいかに創り上げるかという生活科授業のポイントをわかりやすく解説
著者:後藤 正人
文溪堂

VoL 7
「美しい心を育む自然観察」
子どもたちと自然観察をする際のコツやポイントはこれ！自然観察の入門ガイド
著者:菅井 啓之・後藤 紗貴
文溪堂

VoL 8
「学びが深まる “活用”授業アイデア集」
理科の活用の授業をベテラン理科専科の先生が直接指南！目からウロコの実践書
監修:角屋 重樹・編著:高木 正之
文溪堂

好評！既刊シリーズ ●各巻A5判 ●定価:各巻とも本体950円＋税

VoL 1

明日からの授業にすぐ生かせる具体的な手立てがわかる！
北 俊夫 著 112ページ

VoL 2

社会科を指導する意義や役割がはっきりわかる！
北 俊夫 著 104ページ

VoL 3

これだけの算数用語をおさえれば明日からの授業もバッチリ！
加藤 明著 96ページ

VoL 4

自然科学と理科の違いは？理科教育の成り立ち・考え方がわかる！
角屋 重樹著112ページ

VoL 5

学級担任として解決を迫られる時の対応アイデアがいっぱい！
●北 俊夫 著96ページ

株式会社文溪堂
http://www.bunkei.co.jp/